聖　書：創世記 26：34〜27：29
説教題：ヤコブの声だが
日　時：2024 年 1 月 14 日（朝拝）

創世記 26 章ではアブラハムに与えられた神の契約がその子イサクに継承されたことが記されました。26 章に記されたイサクの歩みは父アブラハムの歩みにそっくりでした。イサクは父アブラハムの信仰の足跡に従って歩んだ正統的な継承者であったことが印象的に描かれました。さてその神の契約は今度はイサクからその息子へと継承されます。イサクには二人の息子エサウとヤコブがいましたが、果たしてどちらがそれを担うのか、またそれはどのように現実化して行ったかがこの後の中心的関心となります。二人の内、どちらが神の契約を担うかについては既に 25 章 23 節で明らかにされていました。主はそこで「兄が弟に仕える」と言われました。これはこの双子の兄弟の誕生以前に示された御心です。ここに神の選びは人間の行いによらないという真理が示されています。この御心に基づき、弟が神の契約を担う者となることが具体的に明らかにされて行くのが今日から見る箇所となります。

まず登場するのは兄のエサウです。彼は 40 歳の時にヒッタイト人ベエリの娘ユディトと、ヒッタイト人エロンの娘バセマテを妻に迎えました。ここにエサウがどういう人であるかが端的に現れています。結婚は人生においてただ一人の人と排他的な関係で結ばれるという非常に重要な意味を持つ出来事ですので、その人がどういう人と結婚するかを見れば、その人の価値観や物事における優先順位がはっきり分かります。このエサウは何とヒッタイト人、すなわち周囲に住むカナン人と結婚しました。私たちは少し前に 24 章でアブラハムがイサクのために周囲に住むカナン人からではなく、自分の親族から同じ信仰に立つ者を妻に迎えるようにと慎重に取り計らった記事を読みました。その 24 章は創世記の中で最も長い章で全部で 67 節もありました。これは結婚がいかに重要なテーマであるかを暗示しています。ところがエサウはここであっさりと周囲に住むカナン人と結婚します。これは彼が神の民として信仰を大切にして歩もうとする考えが全然ないことを示しています。25 章後半にはすでにエサウが長子の権利を軽んじて一杯のスープと引き換えにした記事がありました。野に出かけてお腹がペコペコで死にそうな私にとって長子の権利など何になろう。そんなものはくれてやる！と誓いまでして、彼は自分のお腹を満たす食べ物の方を選びました。そこに彼が神の契約を軽んじる人であること、引いては神ご自身を軽く考える人であるこ

とが示されました。今日の箇所も同じです。あれほどアブラハムがカナン人と結婚しないようにと労苦したのに、エサウはお構いなしにカナン人と結婚します。しかも二人の妻をめとりました。彼にとって大事なのは神の約束とか神の御心ではなく、自分の満足、自分の快楽でした。ここにいかにエサウが神の契約を担うにふさわしくない器であるかが示されています。

この結婚はその両親、イサクとリベカにとって「悩みの種」になったと 26 章 35 節にあります。「悩みの種」という部分には印がついていて、欄外に「霊の苦み」とあります。具体的にどういう苦みだったのかは書いていませんが、そのニュアンスは容易に想像できると思います。信仰に立つのではない異教的価値観や習慣がこの家に持ち込まれることによって、そこには何とも言えない苦み、苦しみが常にあるようになったのです。神の民ではない人との結婚は必然的にこのような悩みを、霊の苦みを、その結婚生活に、その家庭生活にもたらすことになるのです。

さてこのようなエサウであったことを踏まえると、27 章最初のイサクの行動に私たちは驚きを覚えずにいられません。何と父イサクはこのエサウに神の契約とその祝福を引き継がせようとします。なぜそうなのでしょうか。これについてはすでに 25 章 28 節にヒントがありました。そこに「イサクはエサウを愛していた。猟の獲物を好んでいたからである」とありました。イサクは兄エサウが好きでした。その理由は彼が仕留めて来る獲物の料理が好きだったからであるというのです。何ということか！と私たちは驚き呆れてしまいます。イサクは 25 章 23 節でリベカに示された「兄が弟に仕える」という主の御心を知らなかったのでしょうか。そんなはずはないと思います。イサクはリベカから聞いていたでしょう。しかしイサクは何とこれに逆らったのです。彼は兄息子の方が好きで、彼にこの特権を継がせたいと思っていました。そしてこれを強行することに後ろめたい気持ちもあったので、ひそかに隠れたところでエサウを祝福しようとしたのではないでしょうか。本来このようなことはその家全体に関わる大事な行事ですから、皆を集めて公に行うべきです。創世記 21 章 8 節にはアブラハムがイサクの乳離れの日には盛大な宴会を催したとありました。しかしイサクは隠れてこれを行おうとしました。誰かに邪魔されない内にやってしまおうとしたのです。イサクよ！どうしたのか！と言いたくなるような姿です。

さてこれを知ったイサクの妻リベカはどうしたでしょうか。彼女は大変な話を耳に

しました。そこで弟息子のヤコブのところへ行き、あなたの兄さんが野に出かけている間に、あなたが父のところへ行き、エサウのふりをして祝福をもらいなさい！と言います。そのためにまずは最上の子ヤギ2匹を取って来なさい。それを私はあなたの父イサクが好むように味付けし、料理します。それを持って行き、祝福を盗んでしまいなさい！そう言います。ヤコブが「でも、兄さんは毛深い人なのに、私の肌は滑らかです」と言うと、彼女は家の中にあったエサウの衣を着せ、肌の滑らかな部分には子ヤギの毛皮を巻き付けました。これで大丈夫！これで目がかすんで半分もうろくしている夫を騙せると彼女はヤコブに言います。こうして彼女が出来事全体を主導したのです。

なぜリベカはこのようにしたのでしょうか。彼女はヤコブが主の祝福にあずかるべき人だと知っていました。彼女が主から直接その啓示を受けました。また彼女は人間的な意味でもヤコブを好んでいたことが25章28節に記されていました。このことからすると、この彼女の行動には信仰から来る思いと、また人間的な思いの両方が混じっていたと考えられます。

そんな時、イサクが兄エサウを隠れて祝福しようとしていることを知りました。これは確かに危機的状況です。何とかしなければならない！そこには信仰から来る衝動もあったと思われます。しかしだからと言って彼女の取った行動が認められるかと言えば、聖書からはそうは言えません。もっと他に方法はなかったのでしょうか。たとえばイサクのところへ行って、それは神の御心に逆らうことではないかと話し合うことはできなかったのでしょうか。リベカとしてはそんな話をしたところでイサクには通じないと思っていたのかもしれません。だからと言って出し抜いてエサウを祝福しようとする夫に対抗して、こちらもさらに出し抜いて祝福を奪おうとする方法が主の前で良しとされるはずがありません。

彼女としては「ではどうすれば良いのか。これ以外に何か方法があるのか。このまま見す見す兄エサウが祝福されるのを黙って見過ごすしかないのか」と問うかもしれません。しかし、だからと言って私たちは罪を犯して良いということにはなりません。正しい目標を追求することは大切ですが、目標が正しいだけでなく、そこに到達するための手段も正しくなければなりません。神はご自身の計画実現のために、私たちが罪を犯すことまでして私たちに助けてもらいたいと思っているわけではありません。

人間には不可能に思えても神にはどんなことでもできます。この神を見上げず、自分の力で、人間の力で、無理に事を進めようとした彼女の態度は信仰的と言うよりはむしろ不信仰です。それは称賛されるべきものではなく、むしろ責められなければならないものなのです。

　ではヤコブについてはどう考えるべきでしょうか。ヤコブは母リベカから父が行おうとしていることを聞いてショックだったでしょう。そして母が、エサウのふりをして祝福を受けてしまいなさい！と提案した時、何と答えたでしょう。本来彼は「お母さん、それはダメでしょう。父を欺いて盗み取るようなやり方は良くないでしょう」と言うべきだったのではないでしょうか。しかし彼は、「兄さんは毛深いのに私の肌は滑らかなので、それはうまく行きそうにない」という観点から答えています。これはうまく行くか行かないかという点から論じる問題ではないはずです。また彼は結局母の言いなりになり、変装して父イサクに近づきます。そして父に「おお、おまえはだれかね」と聞かれた時、何と言ったでしょう。「長男のエサウです」と彼は言いました。これは明らかにウソです。神の祝福を得るためには嘘をついて良いのでしょうか。またイサクが「どうしてこんなに早く見つけることができたのかね」と問うと、「主が私のために取り計らってくださったのです」と主の名を軽々しく持ち出しました。こういう使い方をして良いのでしょうか。イサクはどうしても声がヤコブの声のように思えたため、最後にもう一度 24 節で念押しで尋ねました。「本当におまえは、わが子エサウだね。」　ヤコブは「そうです」と答えました。これは認められるのでしょうか。こうしてヤコブは父から祝福を受けることとなりました。今日はここまでとなります。この後、入れ替わりにエサウがこの場に飛び込んで来てイサクとともに「欺かれた！」と知って大変なショックを受けることになります。

　私たちがここに見るのは何でしょうか。それは滅茶苦茶な家庭ではないでしょうか。この中で悪いのは誰でしょうか。答えはみんなが悪い！ですね。ここを読む人は、なぜ神はこんな家族を神の契約を継承する器として用いたのかと思うかもしれません。もっとふさわしい家族は他になかったのか？と。しかしこうして神の救いはただ恵みによるということがこの上ない仕方で明らかにされているのです。この家族が素晴らしい家族だったから神の契約を担う家となったのではありません。この家族の中に立派な人が一人いたから神はこの家を選んだのではありません。むしろこの家は滅茶苦茶でした。皆が互いに欺き合っています。こんな家族を契約を担う家としたら、神の

救いの計画はたちまち立ち消えになってもおかしくないと思われるところです。しかしこれらの人物たちに妨げられることなく、神の救いの約束はこの後も立ち続けます。この家族が用いられる形で神の救いの約束は受け継がれて行きます。ここにこの箇所が声を大にして語る希望のメッセージがあるのではないでしょうか。そしてそれは聖書全体が語る救いのメッセージの本質そのものなのではないでしょうか。

私たちも自分を見るならそうです。決して立派な者たちではありません。むしろメチャクチャです。この箇所に登場する 4 人の家族よりまだましだと自信を持って言うことはできません。私たちも日々同じような姿を神の前にさらけ出しています。しかしそれによって神の救いのわざは妨げられたり、撤回されたりすることがありません。むしろ神は私たちの罪に打ち勝って救いの働きを進めてくださっています。この創世記 27 章が描いていることは私たちに与えられている救いそのものであることを思って、私たちはただただ恵み深い神を賛美し、礼拝したいのです。

と同時にこのことは私たちがどのように歩んでも構わないという意味ではないことも併せて心に留める必要があります。神の恵みによる救いは私たちにとって慰めですが、私たちの罪に対しては現実的な結果が伴います。今日の箇所の 4 人はそれぞれ自分が犯した罪の報いを受けることになります。エサウとイサクについては次の箇所でより詳しく記されますので、その時に見たいと思います。リベカについてはどうでしょうか。彼女は愛するヤコブに祝福を継がせるために懸命に画策しました。その結果、ヤコブはここから遠い場所へと離れて行かなければならなくなります。いつも家のそばで母の手伝いをしているようなかわいい息子が、今までのように自分の近くにいることができなくなります。それどころか聖書から知る限り、リベカはこの日以来、二度とヤコブを見ることはありませんでした。そういう意味で彼女は愛する息子との地上における交わりを失うこととなったのです。

ヤコブについてはどうでしょうか。彼にはこれから苦い生活が待っています。彼は逃げ延びて行った先でリベカの兄ラバンから騙されることになります。またこの地に帰って来てからも自分がだましたようにだまされます。彼は今日の箇所で犯した罪の代償をこの先何年もかけて支払うこととなるのです。それがどんなに彼の全生涯に重くのしかかるものであったかを私たちは続く章で時間をかけて読むことになります。そういう神の厳しい懲らしめを受けたいなら、ヤコブのような道を行けば良い。しか

し、目指すべきはやはり神に信頼を置いて神の御言葉に従う道を行くことです。

　神はイサクの家がこのようなメチャクチャな家族でも彼らの罪に打ち勝って、恵みによって導いて行かれます。私たちも同じ神の恵みの主権により、今日もこうして支えられ導かれていることを感謝したいと思います。神はこれからもこの恵みの主権をもって私たちを最後まで導き続けてくださいます。ですからこの主の主権を信じ、感謝している者として、主の御言葉にこそ従う者たちでありたいと思います。目標が正しいだけでなく、目標へと至るルートにおいても正しい道のみを踏み行く者でありたいと思います。困難に思われる状況においても奇しい主権を持つ神が、ご自身の方法とご自身の時に従って必ず約束を果たしてくださることを信じて、この神に従う最も確かで幸いな道へ進む者でありたいと思います。